

一食平和運動の歩み②

おやさと研究所准教授
野口 茂 Shigeru Noguchi

国連機関は2009年、飢餓人口（生きるために最低限必要な栄養摂取量を採れない人々）が全世界で10億人を突破し、過去最悪の数字を記録したとする報告書を発表した。2010年には若干改善が見られたものの、世界でおよそ7人に1人が飢えているという深刻な状況に依然として変わりはない。一方で、肥満人口は増加の傾向にあると言われており、日本国内でもコンビニやスーパーから膨大な量の食品が毎日ゴミとして廃棄されている。その量は一日で500トン、5億円相当にのぼるという試算すらある。「何かおかしいのではないか？」手軽さや見た目を重視する今のライフスタイルにそう疑問を抱きつつも、立ち止まることは許されず日々焦燥感に駆られながら仕事に、生活に追われているのが我々お互いではないだろうか。

また、いまだ世界には貧困や自然災害、紛争などの犠牲となり、困難な状況に置かれている人々が多くいるが、彼らのためにはたして一個人として一体何ができるのだろうか。そんな無関心を装いつつも無力感に苛まれがちな我々に対して、自らの心の変革と人々の救済、そして平和実現のための一つの筋道として提起されているのが、「一食を捧げる運動」なのである。

一食運動の基本理念

「一食を捧げる運動」とは前稿でも触れたように、食事などの一欲を節して、その費用をさまざまな人道支援や開発援助のためにお布施する、草の根からの社会運動である。この趣旨に賛同した立正佼成会は1975年に「節食運動」として活動を開始。1980年からは「一食を捧げる運動」と改称し、教団をあげて運動の普及・推進に取り組んできている。

この「一食運動」の活動理念は、「すべてのいのちは、大いなる一つのいのちに生かされた同根の兄弟姉妹である」という仏教の世界観、すなわち「一乗」の精神に基づいているという。地球上にいま一緒に生まれ出ている因縁を思えば、困難に直面する人々に対する援助や奉仕の活動は当然であり、まして仏教者としては率先して行動に移すべきなのだ。こうした信仰信念が、今日まで35年の長きにわたって運動を継続させてきた、その原動力となっているのであろう。

他方、その支援活動は、たんなる金銭や物資を送ることに主眼をおくのではなく、あくまでも信仰者一人ひとりの主体的な信仰実践であることに重点がおかれている。つまり、同運動をとおして、自らが意図的に空腹感を味わうことで飢餓にあえぐ人々の痛みを分かち合い（同悲）、自分の持っているものを人のために捧げる（布施）心を培う。そして世界の平和の実現と、すべてのいのちの平安を願う（祈り）心を涵養する。これら「同悲」「布施」「祈り」という三つの精神が活動に伴うことが何よりも重要であり、信仰者として心に治めるべき点なのである。

新宗教の社会倫理について詳細な研究をおこなったロバート・キサラは、佼成会では内面的信仰（心の入れ替え）という個人の修養のみを強調するのではなく、精神的な救済と同時に社会の変化への努力が勧められ、経済的、社会的な扶助が積極的に要請されていると指摘する。ここに、自らの信仰実践の延長としての「一食運動」と、一般社会で取り組まれている募金や支援活動との違いを、人々は見いだすことになる。先に挙げ

た仏教的な教義に基づく菩薩行の実践であるがゆえに、「なぜ、はるか遠くに暮らす人々に対してまで、支援の手を差しのべなければいけないのか」といった疑問の声は会員からは生まれることはないのだ。

一食運動の実践と展開

現在、一食運動の実践日は毎月1日と15日と定められ、三食のうち一食を抜いてその食費分を「一食平和基金」に献じるのが基本となっている。会員の中には、これら実践日以外にも自主的に「私の実践日」を設け、運動に取り組んでいる方もいるという。また、食事に限ることなく、おやつの一部やコーヒー1杯分でもいい、子供からお年寄りまで「いつでも、どこでも、だれでもが、いつまでもできる運動」として提唱されているのである。

月に数回の食費分などわずかな額のように思えるが、会員が心を合わせるとなるとその額は年間で数億にも達することになる。過去30年以上にわたって寄せられた浄財の合計は、実に100億円を超えた。こうした浄財は「一食平和基金運営委員会」によって、以下のような資金助成や合同・自主プロジェクト、そして緊急支援プロジェクトへと役立てられることになっている。

- 資金助成：一食平和基金の理念に合致する事業に対する資金協力。基金全体の約6割を占める柱となっている。
- 合同プロジェクト：外部団体との協働によるプロジェクト。難民支援の分野ではJEN（特定非営利活動法人ジェン）と、環境・地域開発事業ではJVC（日本国際ボランティアセンター）、そして教育分野ではSVA（シャンティ国際ボランティア会）といった国内でも有数のNGOと提携。活動地域もエチオピア、カンボジア、フィリピン等に広がっている。
- 自主プロジェクト：佼成会独自の活動として、紛争地や被災地に暮らす子供たちに対して学用品や玩具をつめた手作りの袋をおくる「ゆめポッケ・キッズキャンペーン」、植林活動などのボランティア派遣やスタディツアーを実施している。

近年、景気低迷のあおりを受けて、支援の額としては減少傾向が続いているという。しかし、「額の増減が問題ではなく、あくまでもそのお布施に心が伴っているかどうかを重視している」と一食運動の担当スタッフは語る。ある会員は、「忙しくて食事をとれない時があっても、はたして自分自身、空腹に耐える子供たちを意識して節しているだろうか……」と自問していたが、その率直な言葉に誰もが頷くことだろう。

いま、一般のレストランや大学・企業の食堂などでメニューを注文すると、1食につき数十円が途上国での飢餓対策に寄付されるというプログラムが、先進国を中心に世界各地で広まりつつある。たしかに話題性があり、かつ明快で誰もが無理なく続けられる運動であるかもしれない。だが、我々が生きる上で必要不可欠な“食”を通じて、自らの心や生活のあり方を省みると同時に、いかに兄弟姉妹に想いをはせ、一食の僅かな額にその平和への祈りを込めることができるか。「“食費”を捧げる」のではなく、「“一食”を捧げる」という言葉のもつ意味は、我々の想像以上に広くそして重い。

[参考文献]

ロバート・キサラ『現代宗教と社会倫理』青弓社、1992年。